



柏戸の真実

20

出羽ヶ嶽のこと (下)

大巨人見たさに沸く

関東大震災が起きた大正12(1923)年から数年は人々は生活復興に懸け、娯楽などは二の次だった。そのため大相撲も閑古鳥が鳴いた。その救世主が25歳の大男、出羽ヶ嶽だった。大きい分、取り口もゆつたり感に加え、ユーモラスな面があったようで「大巨人みたさ」に相撲場はにぎわいを取り戻した。

だが本人は大相撲に入るのには本意だった。蔵王が雄大に望める上山の山村の農家の生まれ。体は大きい。小さい頃から頭も良かった。地元出身で東京に精神科医院(青山脳病院)を営



出羽ヶ嶽の化粧まわしは師匠を後援する常陸山会から贈られた(写真提供・斎藤茂吉記念館)

は微妙な違いがあったが、境遇的には「義兄弟」だった。

青学中等部に進学

「上山と言ったら今でも茂吉、出羽ヶ嶽ですよ。出羽ヶ嶽は優しい性格だったことがよく知られていますね」と語るのは地元の古窯ホールディングス・佐藤信幸社長(67)。上京後も紀一、茂吉同様、心は常に「蔵王を仰ぎ見た」故郷に抱いている。

青学小を卒業後、文治郎は19歳年上、同じように引き取られていた少年は青山学院中等部に入学した。大きい体でも手先

も器用だったし、養父のようには医者になることに憧れた。「文ちゃんはお相撲さんがいい。絶対強くなれる」と周囲に勧められても逃げてばかりで、時には泣き出した。それでも体はど

んどん大きくなる。養父の知り合いだった「100円札の顔」板垣退助にも角界入りを勧められ、これは断ったが、角聖と呼ばれた大横綱・常陸山の出羽海親方に熱心に勧められ、角界で「一番安心できる預け先」と14歳で入門の運びとなった。文ちゃん自身、自分の体を持って余し始めた面もあった。

最後は三段目転落

現役の大横綱栃木山が「オイ文治、当たってこい」とじきじきに胸を出してくれて番付も上げ、昭和初期は一躍花形力士として、相撲界を引っ張った。

だが大人の体になると巨人症特有の症状が出始めた。自らの上体を支えきれず、

膝・腰を痛め、内臓にも疾患が出始めた。今度は番付が下がりはじめたが律義な性格があつて簡単に相撲はやめず、ついには三段目まで転落。弟として可愛がった茂吉も「番付もくだりく

だりて弱くなりし出羽ヶ嶽見に来て黙しけり」と詠むほどになった。そして14年引退し、田子ノ浦親方として、国技館の入り口で切符のもぎりを担当。その巨体を懐かしむファンからは人気だったという。

文ちゃんの分も応援

両国からは電車で1本の国鉄・総武線の小岩駅近くで焼き鳥屋台を経営、子供はいなかったが、犬と小鳥

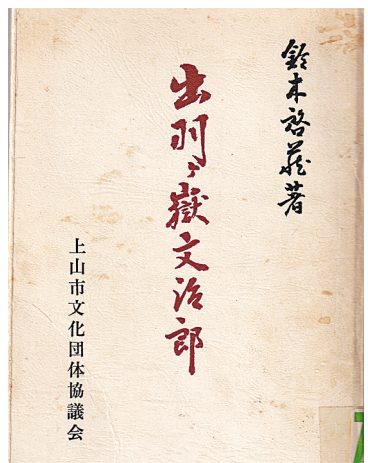
を可愛がり、夫人との仲も良好だった。25年、47歳で早逝したが、不遇の死だったと言われたのは、全盛期の実力、人気が著しいものがあつたからだろう。

戦前の相撲人気は双葉山69連勝(14年)がピークだが、それに至るまでをきっちりつないだ面での功績は大きい。

〇：出羽ヶ嶽が亡くなったのは昭和25年6月9日だが、小岩の自宅で臨終の場に立ち会ったのが当時33歳の現役幕内力士・桜錦(元小結)。この人は後に柏戸の妻になった加藤セツ子の実父。出羽海部屋に所属した弟弟子で、同じ小岩に居住していた縁があつた。なお「田子ノ浦」名跡は現在、元幕内・隆の鶴が名乗っている。「鳴戸部屋」を率いた元横綱隆の里の弟子で、隆の里死去後「田子ノ浦部屋」として部屋を継承。稀勢の里も横綱時代、所属した。

稀勢所属の相撲部屋

〇：出羽ヶ嶽が亡くなったのは昭和25年6月9日だが、小岩の自宅で臨終の場に立ち会ったのが当時33歳の現役幕内力士・桜錦(元小結)。この人は後に柏戸の妻になった加藤セツ子の実父。出羽海部屋に所属した弟弟子で、同じ小岩に居住していた縁があつた。なお「田子ノ浦」名跡は現在、元幕内・隆の鶴が名乗っている。「鳴戸部屋」を率いた元横綱隆の里の弟子で、隆の里死去後「田子ノ浦部屋」として部屋を継承。稀勢の里も横綱時代、所属した。



鈴木啓蔵著
出羽ヶ嶽文治郎
上山市文化団体協議会
元上山市長が就任前に著した一代記。題字は安孫子藤吉県知事(当時)
毎週火曜日付に掲載